S. Ashina

＜前回：オリゲネス＞

（０）教父とは誰か

（１）アレクサンドリア学派とアレゴリカルな解釈

１．アレクサンドリアにおけるユダヤ教とキリスト教の伝統
ヘレニズムのユダヤ教からヘレニズム・キリスト教へ
聖書的宗教とギリシャ哲学の積極的な統合、聖書のアレゴリカルな解釈
→ ギリシャ教父の思索

４．アレゴリカルな解釈
「アレゴリカルな解釈というのは紀元前六―五世紀以来、まずホメロス解釈において確かめられ、次にペルガモンとアレクサンドリアのヘレニズムのアカデミー学園で全盛期を迎え、聖書全般の解釈の支配的なモデルへと展開された多次元の聖書解釈の方法である」、「アレゴリカルな解釈によって、正にこのテキストの中に暗号化されたより高次の知識が発見される。」（シュトゥールマッハー、97）

５．アレゴリカルな解釈は聖書自体にも遡る。
テキストの意味の多重性の問題。恣意的解釈を避ける方法論、どの意味が基本的か。

（２）オリゲネス(185-251)

「キリストを目指す精神的・宗教的な教育者」「禁欲的修道制度の模範」（キュンク、70）

６．アレクサンドリアのキリスト教学校（カテケーシス学校）
「すでにパウロにおいて始まっていた異邦人キリスト教的・ヘレニズム的パラダイムが、神学的な完成に至る」（71）「最初の、方法論的に研究する学者」「聖書の使信をまさに新しい仕方で組織的・神学的に貫徹する」（72）

７．キリスト教最初の体系的神学の構築
『諸原理について』
「オリゲネスが意図したところは、キリスト教教理の徹底的な再解釈であった。それはクレメンスが提唱したキリスト教的覚智の体系的確立であった。」（有賀・著作集５、145）

８．三一論（神とキリスト、聖霊）
「父なる神の善性こそ、泉として父のうちにあり、そこから子が生まれ、聖霊が発出するのである。」（75）
「「あたかも」ロゴスが肉体になった「かのように」見える、ということを意味するのである。こうしてオリゲネスは、養子説(Adoptoonslehre)に近づくわけである。」（ティリッヒ、118）

９．自由意志論
・罪と裁き・救済の前提としての自由意志
・難問：一見反対に見える聖書箇所、ファラオの場合（神がかなくなにした)、譬えによる語り＝「悔い改めても救われるこのないため」。神の全知・予定・摂理との関わり。
「神が配慮を怠ったことに滅びの原因があるのではなく、人間精神の自由な決断(arbitrium)に原因がある」(221)、「神によって与えられた動きを善に向けるか、悪に向けるかは我々による」(225)、「まず個々の人間の行為が原因として先行し、各人がその功績に応じて神から尊い器あるいは卑しい器とされると判断される」(227)

10．終末論
「アポカタスタシス・パントーン」

11．聖書：テキストと解釈
・『ヘクサプラ』: 聖書テキスト自体の研究、本文と諸訳との比較。
・聖書テキストに即した解釈方法
人間存在の三重性 → 聖書の意味の三重性：

身体的意味（字義的・歴史的意味）、魂的意味（道徳的意味）、霊的意味（神秘的意味）
13．新プラトン主義的に刻印されたヘレニズムの影響の下で、問題的な「重心移動」
・神と人間の間の根本的な二元論（旧約聖書にも新約聖書にもない）と、この無限の差異を、「神人」キリストを通して乗り越えること。
・キリスト教神学の中心：イエスの十字架と復活　→　受肉
イースター　　クリスマス
＝「キリスト論におけるパラダイム転換」（キュンク、92）
14．聖書的歴史記述に基づく具体的な救済史から、巨大な救済論的システムへ
（３）カッパドキアの三教父

３．アウグスティヌス

（１）時代と伝記的事項

１．西方教会（ラテン世界のキリスト教→ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の共通のルーツ）における最大の教父(354-430 年)、西方教会の基盤の形成。
古代末期＝中世草創期、ヴァンダル族の足音（アウグスティヌスの死後、一年足らずで、ヒッポの町は、ヴァンダル族に占領される）
２．若きアウグスティヌスと回心
聖人アウグスティヌスの放蕩時代？
13 才（367 年）：タガステ（故郷）　→　マダウラ
16-17 才：カルタゴ（学生時代）、或る女性と出会い・同棲、マニ教に接近
18 才：息子誕生（アデオダートゥス）
29 才(383 年)：ローマへ
30 才(384 年)：ミラノへ
31 才：母モニカ、ミラノへ。女性との別れ（アフリカへ、修道女となった？）
ミラノでの回心
33 才(387 年)：モニカの死
34 才：故郷へ
36 才(390 年)：息子アデオダートゥスの死
37 才(391 年)：ヒッポ・レギウスの司祭（396 年から司教）
43 才(397 年)：『告白』執筆開始（400/401 年に完成）
アンブロシウスの死
３．アウグスティヌスと二人の女性：母モニカと同棲の女性（妻）
人間性＝両義的存在
通説ほど、人間は単純ではない
母の両義性：聖女？　あるいは悪女？
聖母マリア
母と妻の板挟み
↓
原罪とは、アウグスティヌス自身の問題であった。
妻との別れ　→　空しさ
「空しさを埋めようとする空しい努力」「いっそうの空しさ」
神の恩寵のみがこの空しさからの救いを与えることができた
４．「7:15 わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。16 もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。17 そして、そういうことを行ってい

るのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。18 わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。20 もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。21 それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。22 「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、23 わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。24 わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。」（ローマの信徒への手紙）

５．古代教会のヘレニズム的パラダイムからラテン的中世的パラダイムへの転換。
しかし､「きわめて問題の多いラテン教会の発展に対して責任があるということも疑い得ない」（キュンク、133）。
「西欧の神学における性的な事柄の抑圧」「女性の従属的位置づけ」
「創世記二章によれば女は男から、そして男のために造られた」
↓
「アウグスティヌスは、性的なリビドーに異端の烙印を押してしまった」(135)。
現代にまで。「ベネディクト十六世」

６．「恩寵の物象化」「西欧的敬虔における予定をめぐる不安」

（２）哲学

４．認識論・懐疑論
・マニ教への疑問と懐疑思想
キケロの影響（『アカデミカ』、新アカデミア派）
賢者は、すべてをそのままに信じるのではなく、疑わねばならない、人間の認識も判断も主観的、相対的、不確実であり、普遍性や絶対性をもたない。「彼らはすべてについて疑うべきと考え、いかなる真理も人間をとらえない」(『告白』5,10,19)。
↓
人間は蓋然性に満足して生きるべきである。
・『アカデミア派批判』、確実に存在するもの → 『自由意志論』
自己の存在、物体的存在、数学・論理学・哲学などの根本原理
Si fallor, sum.
↓
いかにして真理を認識するか？
聖書解釈
↓

５．言語論
・修辞学の教師
・聖書解釈、説教者（会衆との対話の姿勢）
・『キリスト教の教えについて』
聖書解釈の基本的概念 → 西欧の言語理論の源泉
記号と事柄
記号：自然的記号、意図的記号。記号→解釈→事柄
事柄：享受(frui)と使用(uti)

神

聖書解釈の原理としての愛

愛の秩序（ordo amoris、神への愛、隣人愛、自己愛）

聖書の教え、教会の教理、信仰箇条は愛を目的とし、この目的に即して解釈さればならない。

↓

教義的解釈、アレゴリカルな解釈（イエスの譬え解釈）

（３）神学、異端との論争

６．自由意志論、原罪と恩恵論

・なぜ、人間は欲する善を行わず、欲しない悪を行うのか（パウロ、人間の謎）

意志に対する情欲の優位、意志の転倒性、転倒の習慣化、罪による分裂

↓

この意志の分裂を統一させてくれるものは、神の恩恵のみ。人間が自力で為し得ることはない。パウロ→アウグスティヌス→ルター

・ペラギウス論争

人間の自由意志の観点からのアウグスティヌスの恩恵論への批判。

山田望

『キリストの模範　ペラギウス神学における神の義とパイデイア』教文館。

７．神の国と歴史神学

・ドナティスト論争

サクラメントの有効性をめぐる論争（事効論と人効論）

迫害によって教会を裏切った聖職者のサクラメントは有効か。

教会の聖性（聖なる教会）とは何か。

↓

厳格主義者としてのドナティスト。再洗礼を主張。

↓

一連のカルタゴでの教会会議、第 9 回（404 年 6 月）

アフリカのカトリック教会は、問題解決のために国家権力の介入を要請。

・教会論：善悪の混合体としての教会

教会は聖なるものであるが、現実の教会は完全な聖性を有していない。悪や罪を内にもっている。教会の聖性は構成メンバーの聖性ではなく、サクラメントと聖霊による。

↓

・歴史的現実と終末

歴史の規定する二つの原理、神の国と地の国

歴史的実在は、この二つの原理の混合

神の国としての完成はただ神のわざによって実現する。「神が人類を教育して、その終極目的に達せしめる過程が歴史である」（金子、331 頁）

（４）創造論、哲学と神学、ヘレニズムとヘブライズム

＜問題＞

・ヘレニズムとヘブライズム、存在論と聖書の最初の本格的な接点としてのヘレニズム・ユダヤ教、そのキリスト教への影響

・宇宙論的問題の地平における相互関係→対話と論争の可能性（自然神学）

・ユダヤ教とキリスト教との関係：ユダヤ教はキリスト教の母体である。
　　キリスト教への多層的・多面的な影響
　　聖書とギリシャ哲学との関連づけというキリスト教教父の課題の先駆者

Ａ．創世記１章

1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。
4 神は光を見て、良しとされた。
　……
27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚。空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

Ｂ．創世記２章

7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。8 主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。

Ｃ．アレクサンドリアのフィロン（BC.25-AD.45/50）

８．二段階創造論：『世界の創造』（教文館）
「およそ存在しているものは、「能動的原因」と「受動的なもの」とからなる」「「能動的なもの」とは全世界を統べる「知性」（ヌース）」、「「受動的なもの」とは、それ自体としては生命（魂）を持たず、また自ら動くことはできないもの」（12）
「父なる創造者（デーミウールゴス）が「生まれたもの」に配慮するのは理の当然」（13）
「この世界は六日間でつくられた」（13）、「「生成するもの」の方が「秩序」を必要としてから」、「「秩序」に欠かせないのは「数」」、「奇数は男性、偶数は女性」「完全数「六」」（14）
「神は、「巨大都市」（メガロポリス）をつくろうとして、まず都市の様々な部分の原型を構想した。つまり神は、その原型を素材にして、「可知的な世界」を構想した上で、それを手本として用いながら「可感的な世界」も仕上げていったのである。」（15）
「今つくられた人間は、可感的であり、かくして性状を持っており、身体と魂とから成り、男か女かであり、本性的に死すべきものであるが、これに対し、神の似像になぞらえてつくられた人間の方は、ある種のイデア、類、印章であり、可知的な非物体的であり、男でも女でもなく、本性的に不滅だからである。」（52）
　　第一創造物語→可知的人間（人間のイデア）／第二創造物語→可感的人間（土の塵）
　　神の像
　　↓
　キリスト教におけるプラトニズムの受容、聖書のアレゴリカルな解釈の影響。
　　アウグスティヌスによる創世記注解

Ｄ．アウグスティヌスの創造論

「アウグスティヌス、意志の最初の哲学者」「彼は、生涯、哲学に固執したことによって最初のキリスト教哲学者になったのである」（ハンナ・アーレント『精神の生活　下　第二部　意志』岩波書店、102）。
９．『創世記逐語註解』（『アウグスティヌス著作集 16』教文館）
　訳者（片柳栄一）解説

「アウグスティヌスは創造の二つの段階ともいうべきものを考えており、第一のものを、「初めに、神は・・・・」が示し、第二のものを「光あれと神は言われた」という言葉が示しているとする。・・・原初にあるものによって、神に由来するが、なお不完全な被造物の始めが暗示され、御言葉であるものによって、創造者へと呼び出された被造物の完全性が暗示されている。・・・御父に常に変わらずよりすがり結合して御父とまったく同一である形相を、おのおのの類に応じて倣うことによって、被造物は完全に形成されるのである。」（366）

「霊的被造物は forma なる神の御言葉を認識することによって形成されるのである。認識が存在の本質に属しているのである。決して形成されたことを認識するというのではなく、神に御言葉の認識が形成なのである。そうした在り方が、彼によれば、物体的存在と区別された霊的被造物の特性なのである。」（367）

「この創造の二つの段階は、時間的区別ではないことである。」（368）

「創造という考えの根本にあるのは、被造物の創造者に対する関係の、絶対依存的性格である。しかもその依存は外的である。」（370）

「アウグスティヌスも二つのテキストの顕著な相違に気づいている。」「アウグスティヌスはこの箇所を創造についての繰り返しの言葉とは考えず、ここまで暗示的に示してきた創造の二つの異なった時限についての彼の説、つまり創二・三までは原因的理拠の創造について述べているのに対し、二・四以降はこの理拠に基づく具体的事物の創造、展開と述べているとする考えを聖書の言葉に対応させてより詳細に開陳する。」（382-383）

10.『告白』（山田晶責任編集『アウグスティヌス』中央公論社）第 11 巻、12 巻

「あなたとひとしく永遠なる御言によって、語りたもうすべてのことを、同時にかつ永遠に語りたもう。そして、あなたが生じるようにと語りたもうすべてのものは生じ、しかもそれは、あなたが語ることによってお造りになるままに生じます。」（7/408a）

「神よ、あなたはこの始原において天地をお造りになりました。すなわち、御言において、御子において、御力において、あなたの知恵において、あなたの真理において、奇しきしかたで語り、奇しきしかたで造りたもう。」（9/409b）

「時間がなかったところには、「そのとき」などもなかったのです」、「あなたの年は、すべてが同時にたちどまっています。」（13/413a,b）

「あなたは、あなたから出る始原において、あなたの実体より生まれた知恵において、何ものかを無からお造りになりました。」（12・7/444a）

＜参考文献＞

１．『アウグスティヌス著作集』教文館、『神の国』『告白』岩波文庫。
２．石原謙『キリスト教の源流』岩波書店。
３．山田晶『アウグスティヌスの根本問題』創文社、『アウグスティヌス講話』新地書房。
４．金子晴勇『アウグスティヌスの人間学』創文社。
５．金子晴勇編『アウグスティヌスを学ぶ人のために』世界思想社。
６．宮谷宣史『アウグスティヌス』講談社。
７．片柳栄一『初期アウグスティヌス哲学の形成』創文社。
８．加藤武『アウグスティヌスの言語論』創文社。
９．ハンス･キュンク『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール･バルトまで』新教出版社。
10．平石善司『フィロン研究』創文社。
11．グッドイナフ『アレクサンドリアのフィロン入門』教文館。
12．土岐健治『初期ユダヤ教研究』新教出版社